室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

ノルウェー語Sandnes（サンネス）方言における音調のアクセント論的解釈

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): Norwegian, Accent, Stress, Intonation, Accentology, Rhythm Unit, Unit Tone 作成者: 三村, 竜之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2833

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

ノルウェー語Sandnes（サンネス）方言における音調のアクセント論的解釈

その他（別言語等）のタイトル	An Accentological View of Tones and Tunes in Sandnes Norwegian
著者	三村　竜之
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	63
ページ	77-91
発行年	2014-03-18
URL	http://hdl.handle.net/10258/2833

室工大紀要第 63 号（2013）77~91

学　術　論　文

ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言における音調のアクセント論的解釈

三村 竜之[*1]

An Accentological View of Tones and Tunes in Sandnes Norwegian

Tatsuyuki MIMURA[*1]

(原稿受付日　平成 25 年 6 月 28 日　論文受理日　平成 26 年 1 月 24 日）

Abstract

This paper aims at illustrating the whole mechanism operative in various tonal phenomena in Sandnes Norwegian, the dialect spoken in a south-western town Sandnes. Sandnes Norwegian is so-called stress accent language, and it has two tones, high-level and falling tones, appearing on a tonic syllable. The author formerly argued that the dialect, in the phonological/prosodic sense, has a falling tone alone, and the timing of a pitch movement relative to a tonic syllable is relevant feature in prosodic contrasts. There are, however, still two theoretical issues left open in the former interpretation: i) the necessity of morae as a bearer of a falling tone, ii) the phonological/prosodic nature of tones and tunes irrelevant to prosodic contrasts.

In the present study, the author firstly attempts to solve one of those issues through arguing that the notion of mora lacks the explanatory power and raison d'être in the phonology of Sandnes Norwegian. Then the author introduces *Rhythm Units* and *Unit Tones* based on the descriptive and theoretical frameworks of *Accentology*, an analytical method derived form the Japanese field linguistics, and claim that the two newly introduced notions are effectual in both explaining the several metrical and tonal phenomena and solving the other theoretical issue. Through the in-depth examination of those issues, the author proposes an alternative explanation that the two tones contrasting on the surface are reduced to one falling tone, and the distinction between the presence and absence, not the difference of a relative timing, of a falling tone on a tonic syllable is only relevant to tonal contrast. The author finally concludes that the alternative approach enables us to explain several tonal phenomena in the dialect in a more sophisticated, coherent and phonetically natural fashion.

Keywords: Norwegian, Accent, Stress, Intonation, Accentology, Rhythm Unit, Unit Tone

1　序

1.1　本研究の背景と目的

ノルウェー語は語に主強勢を担う音節が必ず一つ存在し、その音節には、ノルド語（北ゲルマン語）学の伝統で「アクセント（以下、Acc とする）1」と「Acc2」と呼ばれる二種類の音調が現れる（詳細は第 2.1 節を参照）。

これまで筆者は、Bokmål と呼ばれる、首都 Oslo 方言などノルウェー南東部の方言を主に基盤とする標準方言におけるアクセントの音韻論的解釈を公にしてきた（三村 2005）。

*1 室蘭工業大学　ひと文化系領域

特に、この数年間はノルウェー南西部の一方言である Sandnes 方言の記述研究に取り組んでおり、ストレス（強勢）との関連から Sandnes 方言における音調の全体像の解明を試み、独自のアクセント解釈を提案してきた（三村 2012a）。しかしながら、前掲の三村（2012a）において提案したアクセント解釈には、「アクセント核」の担い手としてのモーラの必要性や「（広義の）イントネーション」の音韻論的な位置付けといった理論的な問題点が僅かに残されていた。

このような背景を踏まえ、本研究では、上述の二つの理論的な問題点の解決を試みるとともに、問題点の解決を通じてアクセント解釈の拙案の修正と改善を行い、アクセントを含めた Sandnes 方言における音調のより優れた解釈案を提示する。

1.2 ノルウェー語 Sandnes 方言について

Sandnes 方言[*2] の話される Sandnes は、ノルウェー南西部に位置する Rogaland 県の一都市である。2012 年 6 月に発表された統計では約 6 万 8 千人の人口を有しており、2013 年にはノルウェー国内で 7 番目に大きな都市になると予想されている（詳細は http://www.sandnes.kommune.no を参照）。

Bokmål と比較すると、Sandnes 方言は分節音の点では様々な相違点[*3] を示すものの、韻律的な側面においてはそれほど大きな特徴は示さず、アクセント音調の具体的な型の違い（三村 2012a: 229(82)）や「前気音（preaspiration）」（Wim A. van Dommelen 1999, 三村 2012c）の存在が指摘できる程度である。

なお、既に一連の拙論で度々述べてきたように、Sandnes 方言の音声学及び音韻論に関する先行研究は全体的には乏しい。分節音に関しては Magne Oftedal（1947）に代表される記述研究や Wim A. van Dommelen（1999）に代表される実験音声学的研究などが散見される一方で、アクセントに関する研究報告や調査資料は極めて少なく、管見に及ぶ範囲では筆者の一連の論考を除いてはほとんどなく、音声面での類似性の高い近隣の都市の方言である Stavanger 方言を扱ったもの（例えば Ernst W. Selmer（1927）や Arne Vanvik（1956）など）が辛うじて参照可能であるに過ぎない。

1.3 Acc1 と Acc2

既に冒頭にて導入済みの用語ではあるが、Acc1 と Acc2 という用語はノルド語学においてしばしば多義的である。従って、本節ではこの用語に関して若干の補足を行う。

そもそも Acc1 と Acc2 という用語は、ノルド諸語の内、ノルウェー語、スウェーデン語、デンマーク語の三言語において約 1150 年頃には発生していたと推定される二種類の「アクセント」を指す用語である。この場合の Acc1 と Acc2 とは、歴史的に同一の起源に遡ることの可能なノルド語諸方言の二種類のアクセントにそれぞれ与えた「レッテル」に過ぎず、それぞれの言語（ないし方言）におけるアクセントの具体的な音声実質は考慮されていない。

歴史的な変遷の後、それぞれの言語や方言において Acc1 と Acc2 の具体的な音声実質は変化を遂げ、例えば（後述するように）Sandnes 方言では Acc1 は「（主として）高平調」、Acc2 は「下降調」として現れるが、デンマーク語（標準方言）では Acc1 は stød と呼ばれる「喉頭化（laryngealization）」や「きしり声（creaky voice）」の一種として現れ、その一方で Acc2 は stød の無い状態として現れる。

このように、個々の言語や方言に関して用いた Acc1 と Acc2 という用語は具体的な音声実質を伴っており、従って、Acc1 と Acc2 という同じ用語を用いているとはいえ、それぞれが指し示す現象や具体的な音声実質は大きく異なりうる点に注意が必要である。

本稿では、ノルド語学の慣習に倣い便宜的に Acc1 と Acc2 という用語を用いはするものの、その具体的な音声実質はその他のノルウェー語諸方言やノルド諸語におけるものとは異なる点に十分に留意されたい。

---

*2 本稿において引用する資料は、全て筆者が Sandnes 方言を母語とする話者一名をインフォーマントとして実施したフィールドワークを通じて採取したものである（2009 年から 2012 年にかけて実施; 調査方法並びに調査項目等に関しては、三村（2012a: 80）を参照されたい）。

数年に渡りインフォーマントとして筆者に尽力して下さった Brede Tingvik Haave さんにこの場をお借りして心よりお礼を申し上げる。

*3 例えば、Bokmål において舌尖の「はじき音（flap）」（あるいは「ふるえ音（trill）」）として現れる r の音は、Sandnes 方言では（デンマーク語標準方言と同じく）「有声口蓋垂摩擦音」として現れる。また、これに関連して、Bokmål において特徴的な「反舌音（retroflex）」は Sandnes 方言には観察されず、既に述べた有声口蓋垂摩擦音と歯茎音の組み合わせとして現れる点も特徴的である。

1.4　アクセント論的アクセント観

「アクセント」という用語を用いて何を意図するかは研究者により微妙に異なることがあり、また言語の音声的側面を扱う音声学と音韻論の間でも「アクセント」の概念は異なることがある。さらに、仮に音韻論の領域に限定したとしても、研究対象とする言語が異なれば、アクセントという用語の意図する概念が異なることもある。そこで本節では議論の出発点として共通の理解を図るべく、筆者の唱える「アクセント論」的なアクセントの捉え方について述べておく。[*4]

筆者の考えるアクセントを一言で述べるならば、特定の言語社会において慣習的に共有された、ある音声特徴を利用して実現される語の「音形」である（なお、ここで「語」と呼ぶものは、厳密にはアクセントを担うまとまり、いわば「アクセント単位」とでも呼ぶべきものであるが、議論が煩雑になるのを防ぐために、ここでは便宜的に「語」という用語を用いる）。従って、アクセントが個々の言語において具体的に実現する際の音声実質は、アクセントそれ自体を定義する上では重要ではない。典型的には、例えば日本語に代表される「（音の）高さ／ピッチ」や英語に代表される「（音の）強さ／ストレス」といった音声特徴が利用されるが、先に述べた機能が果たされる限りにおいては、「声門狭窄」や「喉頭緊張」、「（音の）長さ／量（quantity）」といった音声特徴であっても理論的には可能である。

また、利用される音声特徴は、語を構成する分節音（語音）の情報から規定されるものではない。無論、アクセントの具体的な実現には分節音が影響を与えることはありうるが、アクセントの本質的な部分は分節音に固有の音声特性とは切り離されるものである。だからこそ、言語によっては、アクセントが語の知的意味の弁別に寄与しうるのである。

なお、このような「弁別（的）機能」はアクセントの主たる機能ではなく、むしろアクセントが有する本来の特性から派生的に生じた、いわば副次的な機能であると筆者は捉えている。というのも、仮に、超分節的特徴によって作られた「型」が一種類しか無く、従って最小対が存在しない場合であっても、その「型」を分節音の特性から導き出すことができない以上、分節音のレベルとは独立した自律的なものとして、つまりは「アクセント」として捉えられるからである。「型」の対立により知的意味の弁別がなされなくとも、歴とした「型」は存在するのである。

本稿の主題との関連で留意すべきは、筆者がここで「型」と呼ぶ「分節音のレベルとは独立した自律的な音形」の全てがアクセントではないという点である。アクセントの「型」は確かに語全体に被さるものではあるが、その「型」は語のある一か所に現れる本質的な特徴によって導き出すことができると考える。この点でアクセントは、例えば中国語北京方言に見られるような、語を組み立てる音節のそれぞれに音韻論的に有意義な音声特徴の現れる「声調（tone）」とは異なる性質を有する。

このアクセントが有する本質的な特徴、すなわち音韻論的に真に有意義な特徴は、例えばイントネーションなど、少なくとも語レベルでは音韻論的に指定（specify）する必要のない特徴を分離することによって初めて得られるものと考える。つまり、我々が実際の発話において観察することができる現象は、実はアクセントの上にイントネーションなど様々な音声特徴の被さった結果生じた重層的な物であり、従って、単に語が単独で発音された際の音形を観察しただけではアクセントを導くことは不可能なのである。あらゆる環境や条件における音形を観察して分析を進め、様々な特徴を分離することによって、アクセントとして真に弁別的な属性を「抽出」しなくてはならないのである。

2　Sandnes 方言における音調の概要

2.1　資料

まず、本格的な議論に移る前に、Sandnes 方言に置ける Acc1 と Acc2 の具体例を概観する。次頁上部の（1）を参照されたい（Acc1-Acc2 の順に示す）。

（1a）に示した語例はアクセントの点で対立する（疑似）最小対の例、そして（1b）の語例は複合語の例である。これらの資料から Acc1 と Acc2 に関して次の二つの点を読み取ることができる: 1) Acc1 は（主に）高平調が、Acc2 は下降調が主強勢を担う音節に現れる; 2) 高平調と下降調は、いずれ

*4 ここで「アクセント論的」と呼ぶ筆者のアクセント観は、特に上野善道（1980、1989）に代表される日本語方言アクセント研究におけるアクセントの捉え方、並びに氏の理論に影響を与えたと考えられる川上蓁の一連の論考（川上 1995 を参照）からその着想を得ている。

(1)[*5]

a. (i) *avtale* [^{1}áːʊ.tʰàː.la HML]「約束する inf.」– *avtale* [^{2}áːʊ.tʰàː.lə FML]「約束」

(ii) *leser* [^{1}léː.sə HL]「読む pres.」– *lese* [^{2}léː.sa FL]「読む inf.」

b. (i) *sjokoladekake* [^{2}ʃo.ko.láː.də.kùː.gɑ MMFMML]「チョコレートケーキ」

(< *sjokolade* [^{2}ʃo.ko.láː.də MMFL] 「チョコレート」 + *kake* [^{2}káː.gɑ FL]「ケーキ」)

(ii) *fagordbok* [^{2}fáːg.òːʁ.bôːg FML]「専門用語辞典」

(< *fag* [^{1}fáːg H]「分野」+ *ordbok* [^{2}óːʁ.bòːg FL] 「辞書」)

cf. *ordbok* < *ord* [^{1}óːʁ̥ H]「単語」 + *bok* [^{1}bóːg H]「本」

も主強勢を伴う音節にのみ現れ、副次強勢などその他の強勢を担う音節には現れない。

また、以下に示す語例から、主強勢を担う音節に主として「高平調」を伴う語では、任意で「高平調」に代わり「下降調」(F の記号で示す) や「(短い) 上昇調」(R の記号で示す) が現れることが読み取れる:

(2)

a. (i) *ned* [^{1}néːʁ̥ H∼F]「下方へ」

(ii) *avis* [^{1}a.ʊ́ːs MH∼MF]「新聞」

b. (i) *Amerika* [^{1}a.méː.ʁi.ka MHML∼MRML]「アメリカ」

(ii) *beklage* [^{1}bə.kl̥áː.ga MHL∼MRL]「遺憾に思う」

なお、資料として稿末の付録の表 1 と表 2 に示した語も参照されたい。ローマ数字は音節数を、アラビア数字は (語頭から数えた) 主強勢の現れる位置を表わす。また、表中の「—」は該当する語例が存在しないこと (accidental gap) を示し、網掛けの箇所は構造的な理由から該当する語例が存在しない (structural gap) ことを示す。

2.2 想定される解釈案とその問題点: 先行研究の検討に代えて

既に述べたように、Sandnes 方言のアクセントに関する先行研究は極めて乏しい。そこで、ここでは、首都オスロの方言を主たる基盤とする標準方言である Bokmål を対象とする先行研究に倣い想定されうるアクセントの解釈案を提示し、さらにその解釈案の問題点を指摘することで後の議論に繋げたい。

まず、Carl Hjalmar Borgstrøm (1938) などに代表される古典的な立場では、主強勢を伴う音節に Acc1 と Acc2 という二つの toneme を設定する。つまり、主強勢を担う音節に現れる音調の「種類」の違いが Acc1 と Acc2 を区別する上で有意義な特徴とする解釈である (Borgstrøm 1983: 260-263)。

確かにこの立場では Acc2 の音調は適切に説明することは可能かもしれないが、既に (2a) に示した *ned* や *avis* など末尾音節に主強勢の現れる (oxytonal) 語において任意に現れる下降調や、(2b) に示した *Amerika* や *beklage* のように第二音節以降の音節が主強勢を担う語において観察される短い上昇調がなぜ現れるのか、音声学的に適確に説明することができない。

つまり、伝統的な解釈に倣い、「高平調イコール Acc1」、「下降調イコール Acc2」という固定的な図式で音調を捉えてしまうと、*ned* や *Amerika* などの語の主強勢を伴う音節に下降調や上昇調が現れうるという事実を適切に説明することができないのである。以上から、二つの toneme を設定する伝統的な解釈には問題が残る。

同じく伝統的なノルウェー語のアクセント解

*5 本稿での資料の提示方法や用いる音声字母並びに記号はこれまでの拙論 (三村 (2011) など) においてと同様であるため、詳細は前掲拙稿を参照されたい。なお、音声表記の先頭に付した上付きのアラビア数字 1 と 2 はそれぞれ Acc1 と Acc2 を示す。また、音調の表記には F (下降調)、H (高平調)、L (低平調)、M (中平調)、R (上昇調) の記号を用いているが、これらの記号は飽くまでも各音節の音調を音韻論的な解釈を経た上で大まかに三段階に分けて捉えた、言わば簡略的な表記に過ぎない。従って、仮に同じ記号で表記された音節であっても、具体音声としては厳密には高さが異なりうる点にくれぐれも留意されたい。

なお、本稿で用いる略号は以下の通り: adj.「形容詞」、fem.「女性」、inf.「動詞不定形」、masc.「男性」、pl.「複数形」、pres.「現在形」、sg.「単数形」。

釈としては、例えば Arne Vanvik（1956）のように、語（音節にあらず）は全て Acc1 と Acc2 という二つの toneme のいずれかが被さっていると捉える立場がある。日本語アクセント論でいう「語声調」（早田輝洋 1999）や「N 型アクセント」（上野善道 1984）に通ずる解釈で、語の長さ（音節数）を問わず、音調の型は常に二つであるとする立場である。しかしながら、Acc1 の高平調や Acc2 の下降調の現れる位置は常に主強勢を担う音節であり、また稿末の表 1 と表 2 に示した語例からも読み取ることができるように、Sandnes 方言における主強勢の位置は日本語諸方言における「N 型アクセント」のように語中における特定の音節であるとは限らない。従って、語に被さる音調の型は主強勢の位置に応じて二つ以上になる可能性があり、この点からいわゆる「二型アクセント」的な解釈は成立しない。

なお、伝統的なノルウェー語アクセント研究では、第一音節に主強勢の現れる二音節語に考察の範囲がほぼ限定されており、また分析対象とする語の語種も固有語（ゲルマン語あるいはノルド語起源の語）がほとんどである。従って、第二音節以降に主強勢の現れる多音節語や外来語なども広く視野に入れる必要がある。

次節以降では、このような先行研究が抱える問題点を解決すべく筆者が提案したアクセント解釈案を要約し、その論拠となる諸事実とその分析を概観する。

3　アクセントの抽出: 拙案の概略

3.1　拙案の要点

筆者は、第 2.1 節において概観した資料に基づき、また前節において概観した先行研究の問題点を踏まえ、Sandnes 方言のアクセントに関して以下に要約するような結論を導いた（三村 2011, 2012; 傍点による強調は筆者）:

(3) a. Acc1 の語では主強勢を担う音節の内部の音調は指定されておらず、当該音節の直後に音調の下降がある。従って、「高平調」～「下降調」～「（短い）上昇調」といった種々の音調が任意で現れうる。

b. Acc1 と Acc2 はいずれも下降調という一種類の音調からなり、主強勢を担う音節に対する音調の下降の相対的な位置の違い（当該音節の直後か内部かの違い）がアクセント対立において真に弁別的な特徴である。

c. Sandnes 方言のアクセントは、位置の異なる二種類の下降調のいずれかを伴う強勢がアクセント核であるストレスアクセントの一種である。

以下、第 3.2 節と第 3.3 節では、上記の結論を導く際に論拠とした諸事実を、三村（2011, 2012a）以降の調査で新たに得られた資料から追加並びに補足を行いながら、その解釈について概略を述べる。

3.2　非関与的な音調（広義のイントネーション）の分離

既に触れたように、稿末の付録に示した表 1 と表 2 は、それぞれ主強勢を担う音節に（主として）「高平調」と「下降調」の現れる語を、音節数（ローマ数字で示す）と語中における主強勢の位置（アラビア数字）に基づいてまとめたものである。

表 1 と 2 に示した資料から、Acc1 と Acc2 のそれぞれの語が有する音調型に関して以下の二点を読み取ることができる:

(4) a. 主強勢を担う音節に先行する音節は全て常に中程度の高さの音調（「中平調（M）」を伴っており、この音調は、例えば表 1 の *humaniora* と表 2 の *memorisere* の対に見られるように、語の音調型を相互に区別する上では有意義ではない。

b. 主強勢を担う音節に後続する音節は常に末尾音節に向けて漸次的な下降を示しており（. . . ML . . .）、例えば表 1 の *menneske* と表 2 の *ananas* の対において見られるように、語の音調型を相互に区別する上では有意義ではない。

以上から、語の音調型を形成する音調の内、主強勢を担う音節に現れる音調、つまりは「高平調（～下降調～（短い）上昇調）」と「下降調」の二つを除く全ての音調は、語における主強勢の位置に応じて自動的に導き出すことができる。従って、これらの音調は、アクセント対立においては非関与的な音調として分離することが可能であるとともに、アクセント抽出の作業過程においてその

手続きが必須であることが明らかとなる。

3.3 強勢の音韻論的位置付け

これまで、英語やドイツ語などの研究を通じて、ストレス（強勢、強さ）アクセントを有するとされる言語は共通した特徴を幾つか有することが指摘されてきた（例えば、早田輝洋（1988）や窪薗晴夫（2002）を参照）。

本研究が考察の対象とするノルウェー語も英語やドイツ語などと同じくゲルマン諸語に属し、従来からストレスアクセントの言語であるとされてきたが、ストレスアクセントを有することを積極的かつ明示的に論じた研究は管見に及ぶ範囲では皆無であった。

そこで筆者は、早田（1988）や窪薗（2002）が指摘する諸特徴に加え、さらに自身の調査における観察を通じて得られた知見を踏まえ、以下に示す諸条件並びに諸制約を論拠として、Sandnes 方言がストレスアクセント有する言語であることを結論づける:

(5) a. **音節構造（音節量）の制約：**
強勢を担う音節は CV 音節（軽音節）であっては許されない。

b. **強勢音節の体系的優位性：**
(i) 強勢を欠く音節には立ちうる母音音素の数に限りがあるが、強勢を担う音節にはそのような制限は無い（例: 長母音）。
(ii) 強勢を欠く音節には音節頭子音（onset）と音節末子音（coda）に子音連結を含む複雑な構造は現れにくいが、強勢を担う音節にはそのような制限は無い。

なお、既に言及したように、Sandnes 方言では強勢に加えて Acc1 や Acc2 に観察される音調も音韻論的に有意義な機能を有する。この点に関して、筆者は既に三村（2012a）において、強勢とこれらの音調が音韻論的には同等の資格を有してはおらず、一種の「主従関係」にあることを指摘した。そして、この事実から、Sandnes 方言のアクセントが主強勢を担う音節における音調（の位置）が有意義なストレスアクセント（の一種）であることを主張した（「高さ（高低，ピッチ）アクセント」にあらず）。

本稿では、その論拠として新たにその後の調査で得られた資料を以下に追加する:

(6)

a. *gruppe fire* [g͡ʁʉp.pə ²fíː.ʁɑ MM FL]
「第 4 グループ」
cf. *fire gruppe* [²fíː.ʁɑ ²g͡ʁʉ́ʰp.pə FM FL]
「4 つのグループ」

b. *nummer en* [nom.mɔʁ̥ ¹ǽn̩ MMH]「1 番」
cf. *et nummer* [¹éʰtt ¹nóm.mɔʁ̥ H HL] (*sic*)
「1 つの番号」

Sandnes 方言では、(6) に示したような「名詞＋数詞」という統語構造は常に「弱強」という強勢の型を伴い、名詞は本来有する強勢を失うことになる。例えば (6a) の *gruppe* と (6a) cf. の *gruppe* を比較されたい。強勢の消失に付随して本来有していた音調も消失していることを読み取ることができるはずである（*fire gruppe* における F から M への交替に注意; なお、M で標記した音調の「正体」に関しては第 4.2 節を参照されたい）。

ここで注目すべきは、逆の事例、つまり音調が保持されながらも強勢が失われる事例というものが存在しないという点である。この事実は、Acc1 や Acc2 における音調の対立が、常に当該音節における強勢の存在をその前提条件としていることを示唆しており、ここから Sandnes 方言の音韻論において強勢と音調の間に「主従関係」（一種の含意関係）が存在することが明らかとなる。

同様の現象は文のレベルにおいても観察することができる（便宜上、正書法の大文字書き並びにゴシック体の音調記号を用いても強勢の所在を示す）：

(7)

a. *Jeg* *LIker* *henne.*
I NOM. like PRES. she OBJ.
[eg M ²líːgə **FM** hʉ L]

b. (*Hvem liker du?*
“Who do you like?” に対する答えとして)
Jeg *liker* *HENne.*
I NOM. like PRES. she OBJ.
[eg M li(ː)gə MM ¹hʉ́ː **H**~**F**]

c.（*Han liker henne ikke, . . .*
“He doesn’t like her, . . .” に続く発話として）

(men)	*JEG*	*liker*	*henne.*
(but)	I NOM.	like PRES.	she OBJ.
[(men)	[1]é:g **H**∼**R**	li(:)g(ə) M(M)	(h)ʉ L]

（7a）の文はニュートラルなリズムを伴っていると考えられ、文を構成する三つの語の内、動詞である *liker* がリズムの拍（ビート）を担っている。一方、（7b）に示した文は、形態統語論的には（7a）の文と同一の構造を有してはいるが、談話において先行する疑問文 *Hvem liker du?*との繋がりから人称代名詞 *henne* にフォーカスが置かれ、その結果、動詞 *liker* の有する強勢が消失するとともに、同じく本来有していた音調（Acc2; F）も消失している（F が M と交替している）。また、（7c）の文は、（7b）の文とフォーカスの置き方は異なるものの、等しく動詞 *liker* の強勢が失われており、それに付随して本来の音調（F）も失われている。

これまで、ノルウェー語（や同じくノルド語に属するスウェーデン語）のアクセントを「高低アクセントと強弱アクセントの併存」や「（高低アクセントと強弱アクセントとは別の）中間的なアクセント」（例えば、城生佰太郎 2008: 134[*6]）とする見解も見られた。これに対して筆者は、本節において提示した強勢と音調の間に観察される「主従関係」を論拠として、Sandnes 方言のアクセントは飽くまでも強勢が基盤となっており、さらに強勢を担う音節に現れる音調がアクセント対立において有意義であるストレスアクセントの一種（「音楽的ストレスアクセント」）であると主張する。

4　三村 (2012a) の改善案及び修正案

4.1　下降の「位置」から下降の「有無」へ: 下降調の担い手の問題

第 3 節において概観したアクセント解釈の拙案には、下降調の担い手に関する次のような理論的な問題点が残されていた (三村 2012a: 93):

(8) **下降調の担い手に関する問題点**[*7]
主強勢を担う音節の「内部」での下降と「直後」での下降という位置の差異をアクセント対立における弁別的な特徴とする解釈は当該音節を「割る」ことを要求し、自ずと下降調の担い手としてモーラの存在を考慮する必要性が生じる。

この問題に関して、筆者は既に三村（2013a）において「Sandnes 方言においてモーラの概念は不要であり、かつ設定することが困難な単位」であるとの結論を導いた。三村（2013a）の主張を要約すると以下の通り:

(9) a. 音節構造の「最大性制約（maximality constraint）」や「最小性制約（minimality constraint）」など、モーラの概念を用いることで優れた説明が可能となると考えられる（あるいは唱えられてきた）現象が、モーラを用いずとも音節の概念のみで説明が可能であり、またモーラを用いることにより制約自体成立しなくなるという自己矛盾の危険がある。
b. Sandnes 方言には、（複合語後部要素に観察される「長母音の寸詰まり現象」のような）モーラの存在を疑問視させるのみならず、モーラを用いることでむしろその実体を十分に捉えることのできない現象が存在する。

さらに筆者は、三村（2013a）において、モーラを設定しないことにより Sandnes 方言のアクセントの記述が簡便になされる可能性を指摘し、

*6 城生（2008: 134）は同頁の注において「私の教え子である福盛貴弘氏は福盛貴弘（2002）において、強さと高さの中間にあるアクセントをツヨサの「ツ」とタカサの「カサ」のコンタミネーションから、「つかさアクセント」と命名している」と言及し、「スウェーデン語やノルウェー語などでは、高さとは別に強さアクセントが区別されている。このような例を並べてみると、強さアクセントと高さアクセントだけではいささかオーバーロードであり、両者の中間にもうひとつ別の新たな分類上の名称を設けた方が妥当であるということになる」と自らの見解を述べている。

*7 この問題点は三村（2011）に対して聴衆より私信にてご指摘を頂いたものである（2011 年 11 月 28 日）。貴重なご意見を下さった上野善道先生（国立国語研究所）ならびに小林正人先生（東京大学）にこの場をお借りしてお礼申し上げる。

以下に示すようにアクセント解釈の拙案を修正することを提案した（既に示した（3）と比較されたい）：

(10) a. **Acc1 に関して:**

(i) 音調は指定しない（日本語アクセント論でいうところの「無核型」に相当）

(ii) 主強勢を担う音節に現れる「高平調」は、主強勢が（イントネーションにより）音声的に実現したものである。

b. Acc2 に関して:

音節内部における音調の下降は、（モーラではなく）音節自体に与えられた「下降調」が実現したものである。

c. 弁別的特徴に関して:

下降の「位置」の違いではなく「有無」がアクセント対立において弁別的な特徴である。

既に（第 2 節において）述べたように、*ned* や *avis* など末尾強勢（oxytone）の語（Acc1 と解釈）では強勢を伴う音節に任意で下降調も現れ、拙案ではこれを「（後続音節が存在しないために）音節末に与えられた下降調が実現せず、（音節内部は音調が無指定のため）発話末の下降イントネーションが現れた」ものとして解釈してきた。しかし修正案では、そもそも音調が無指定である強勢を担う音節にイントネーションが現れたものとして捉えることができ、より簡略で且つ音声学的に自然な説明が可能となる。

さらに、修正案では下降調の「位置」の指定をする必要がなくなり、自ずと「モーラ」の概念も不要となるため、全体としてより簡潔でかつ経済的な記述が可能となる。

4.2 「広義のイントネーション」の音韻論的位置付け:「リズム単位 rhythm unit」と「単位音調 unit tone」の提唱

これまで資料を通じて示してきた Acc1 と Acc2 の音調型を図示すると以下のように要約することができる（#は語境界を指す）：

(11)

$$\#(\mathrm{M}\ldots\mathrm{M})\left\{\begin{array}{ll}\mathrm{Acc1:} & \mathbf{H}(\sim\mathbf{R}\sim\mathbf{F})\\ \mathrm{Acc2:} & \mathbf{F}\end{array}\right\}(\mathrm{M}\ldots\mathrm{M})(\mathrm{L})\#$$

つまり、主強勢を担う音節には「高平調」（Acc1; 任意で「（短い）上昇調」や「下降調」も）と「下降調」（Acc2）のいずれかが現れ、また主強勢を担う音節に先行する音節には「中平調」が、後続する音節には漸次的な「下降調」が現れる、という方である。

これまで、主強勢を担う音節を除く全ての音節に現れる「広義のイントネーション」として扱ってきた音調を、アクセント対立においては有意義ではないという点から語彙（レキシコン）レベルでは指定が不要であり、従ってアクセント抽出の過程において取り除いてきた。しかしながら、今一度、この「広義のイントネーション」の理論的な位置付けが求められる。

というのも、Acc1 の音調型のように、主強勢を担う音節が「高い」音調を伴い、かつ語末にかけて漸次的に下降していくという遷移は、音響並びに生理音声学的な観点から見て至極自然な現象であると考えられるが、一方、Acc2 の音調型では、（11）から読み取ることができるように、主強勢を担う音節に直接後続する音節は（末尾音節でなければ）必ず中程度の高さ（M）まで上昇することが要求されており、Acc1 の音調型に観察されるような音調の「自然下降」に反する不自然な変動を示すためである。

このような Acc1 と Acc2 の音調型は、語彙レベルでの指定が必要ないという意味では確かに「イントネーション」として位置付けてよいものであるが、その一方で（11）に示したような一定の型を常に示しており、改めてこの「イントネーション」の本質を明らかにする必要がある。

そこで筆者は、句や文の音調に着目したい。次頁上部の（12）を参照されたい（正書法の大文字書きとゴシック体の音声記号は強勢を表わす）。例えば（12a）の文をみると、リズムの拍（文強勢）を担う音節が三つ（*SA, IK, SI*）ある。この文強勢を担う音節が、それぞれ前後に現れる弱音節を付き従わせる形で「まとまり」を成していると筆者は考える。同じく（12a）を例にとると、*Han SA at han, IKke ville, SI det* がそれぞれこの「まとまり」を成していると言える。

筆者の唱えるこの「まとまり」は、Kristoffersen (2000: 275) が Bokmål のリズムの分析において‘Accent Phrase’と名づけた単位や、Grønnum (2007: 82) がデンマーク語（標準方言）のイントネーションを記述する際に‘trykgruppe（英 stress

(12)

a. *Han* *SA,* *at* *han* *IKke* *ville* *SI* *det.*
he NOM. say PAST that CONJ. he NOM. not ADV. will PAST say INF. that PRON.
[hɑn M [1]sá: **H**(**R**) at M (h)ɑn M [2]íʃʃə **FM** ʋilə MM [1]sæ̆ɪ̯ **H**(**R**) rə L]
「彼はそんなこと言わないと言った。」
cf. 単独形**:** *han* [[1]hánn H∼F], *ville* [[2]ʋíllə FL]

b. *Jeg* *kan* *GODT* *HJELpe* *dig.*
I NOM. can PRES. pleased ADV. help INF. you OBJ.
[e(g) M kɑn M [1]gɔ́ʰtt **H** [2]jél̥pa **FM** ɾeg L]
「手伝ってあげますよ。」
cf. 単独形**:** *jeg* [[1]é:g H∼F], *kan* [[1]kʰánn H∼F], *dig* [[1]dé:g H∼F]

group）’と呼んだ単位にほぼ相当するもので、筆者は「**リズム単位 rhythm unit**」と呼ぶことにする。

Sandnes 方言の「リズム単位」を図示すると以下のようになる（σ は音節を、‖はリズム単位の境界を示す）:

(13)「**リズム単位」の構造**

. . . ‖(σ . . . σ)σ́ (σ . . . σ) ‖ σ́ . . .

つまり「リズム単位とは」、（先行する弱音節があればそれも含めて）強勢を担う音節から次の強勢を担う音節の直前の弱音節までのまとまりである。上に示した（12a）では *Han SA at han, IKke ville, SI det* の三つが、また（12b）では *Jeg kan GODT, HJELpe dig* の二つのまとまりがそれぞれ一つの「リズム単位」を形成している。

ここで注意すべきは、いずれのリズム単位も（11）に要約した音調を伴っているという点である。それぞれのリズム単位に被さっている MMHML や FMML、HL といった音調は、いわばリズム単位の結束や境界を韻律的に明示する機能を有していると考えられるのである。筆者は、これらの音調を「**単位音調 unit tone**」と呼ぶことにする。

以上の議論をまとめると、これまで筆者が「広義のイントネーション」として扱ってきた音調は全て「単位音調」として理論的に位置づけることが可能となる。Sandnes 方言における「単位音調」を抽象化並びに図示すると以下の通り:

(14) **Sandnes 方言の「単位音調」**

‖(M . . .) σ́ (M . . .) (L)‖

ここで、「リズム単位」並びに「単位音調」という用語について若干の補足を行うことにする。というのも、本研究において「リズム単位」並びに「単位音調」と呼ぶ概念を当初は川上蓁（1961）や上野善道（2003）に倣い「アクセント句」並びに「句音調」と呼んでいたが、日本語アクセント研究において提唱されるこれらの概念と筆者が本研究において提唱する概念が異なっており（上野: 私信 2013 年 6 月 15 日）、不必要な混乱を避けるべく後に用語の修正を行ったためである。

まず、「リズム」という用語を用いた理由について。後述するように、筆者の概念としては「アクセント」とは「語（レキシコン）」が有する韻律的な属性であるため、統語論的な意味での「句」や「文」に相当する構造体に被さる韻律特徴を「アクセント」とは認めない。このような理由から、上野が用いる「アクセント」や Kristoffersen が用いる‘accent’という用語は避けた。

また、筆者の考える「リズム単位」とは、形態統語論的な意味での単位の「大きさ」に拘らず純粋に韻律的な観点からリズム上のまとまりを成すものである。従って、Grønnum が用いる‘tryk（英 stress）’という用語ではリズムの拍を担わない種々の「ストレス」をも含みうる嫌いがあるため、敢えて「リズム」という語を用いた。

続いて‘phrase’や「句」という用語を避けた理由についてであるが、繰り返しになるが、筆者

(15) **Sandnes 方言における音調の構造**

$$\left\{\begin{array}{ll}\text{Acc1 (e.g. } \textit{Leninisme}\text{):} & /\sigma\ \sigma\ {}'\sigma\ \sigma/ \\ \text{Acc2 (e.g. } \textit{marmelade}\text{):} & /\sigma\ \sigma\ {}'\sigma]\ \sigma/\end{array}\right\} + \|(\text{M}\ldots)\acute{\sigma}\ (\text{M}\ldots)\ (\text{L})\| = \left\{\begin{array}{c}[\text{MMH\!\!\acute{}L}] \\ [\text{MM\acute{F}L}]\end{array}\right\}$$

の提唱する「リズム単位」は形態統語論的な意味でのサイズは問わないため、Kristoffersen が用いるような‘phrase’や日本語アクセント研究で唱えられている「句」という用語では不必要な誤解や混乱を生じさせる嫌いがある。従って、敢えて音韻論や統語論など特定の分析領域に縛られない用語である「単位」という用語を採用したのである。[*8]

以上、Sandnes 方言において音韻論的に有意義でない音調を「単位音調」なる概念を用いて理論的に位置づけることが可能であることを論じてきた。その際、引用してきた資料はいわゆる形態統語論的な意味での文であったが、確かに句や文に「リズム単位」が現れることが一般的ではあるものの、実際の発話においては一語で「リズム単位」を成すことも理論的にはあり得る。これまで (1) や (2) や稿末の表 1 と表 2 などで示した「語」の資料に観察される M や L といった音調も実は「単位音調」の一部であり、これらの音調は語が単独で「リズム単位」を成したがために現れたものに過ぎない。「単位音調」は飽くまでも「リズム単位」の属性であり、語に固有の属性（つまりはアクセント）は主強勢を担う音節に指定される下降調の有無のみなのである。

ここまでの議論をまとめると、これまで考察してきた（形態統語論的な意味での）「語」が有する音調型は、「語」に固有の韻律的な属性である「アクセント」（つまり「下降調の有無」）の上に「リズム単位」の属性である「単位音調」が被さって作られた重層的なものとして分析されると結論づけることができる。Sandnes 方言の音調の仕組みを抽象化し図示すると本頁上部の（15）の通り（音韻表記中の右カギ括弧 /]/ は下降調を指す; また上付きの縦棒 /ˈ/ は強勢を表わす）。

現実の発話では、（15）の右端に記した出力形に加えて、さらに発話の意図などの必要に応じて「リズム単位」の末尾（形態統語論的には語末や文末などに相当）に上昇調や下降調といったいわゆる「狭義のイントネーション」が現れると考える。

なお、最後に一点、リズム単位と単位音調に関して補足をしておく。というのも、リズム単位の「切れ目」や「まとまり方」、あるいは単位音調の型は決して一定のものではなく、実際の発話の内容に依存するものであると考えられるからである。例えば、既に（7）において考察した三つの *Jeg liker henne.* という文はどの語が文強勢を担うか、いわばフォーカスの置き方の点でのみ異なっていた。しかしながら、談話レベルでのフォーカスの置き方の違いが韻律的にはリズム単位の結束の仕方や境界の位置の違いとして現れており、最終的には単位音調の型、つまりは全体的な文のメロディーの違いとして反映されているのである。このように、リズム単位や単位音調という概念は、統語論的な意味での文構造と対応する固定的なものではなく、むしろ実際の発話では文構造と一致するとは限らず、文や句の内容に応じて柔軟に変動しうるものなのである。

5　結語

5.1　まとめ

以上、本稿では、ノルウェー語 Sandnes 方言の音調の解釈に関してアクセント論の立場から詳細な考察と議論を行った。アクセント対立において真に有意義である特徴を厳密な作業過程を経ることで抽出し、またアクセント対立において余剰的な特徴を「リズム単位」や「単位音調」という新たな概念を導入することにより理論的に処理することで、Sandnes 方言の音調のメカニズムを解明した。

本研究の結論を要約すると以下の通り:

(15) a. Sandnes 方言は音調の「有無」が音韻論的に有意義な二種類の主強勢をアクセント核とするストレスアクセントを有する。

*8 日本語アクセント論における「アクセント句」という用語の意味とその他の研究領域における用語の誤用に関しては、上野（2011: 322-323）を参照のこと。

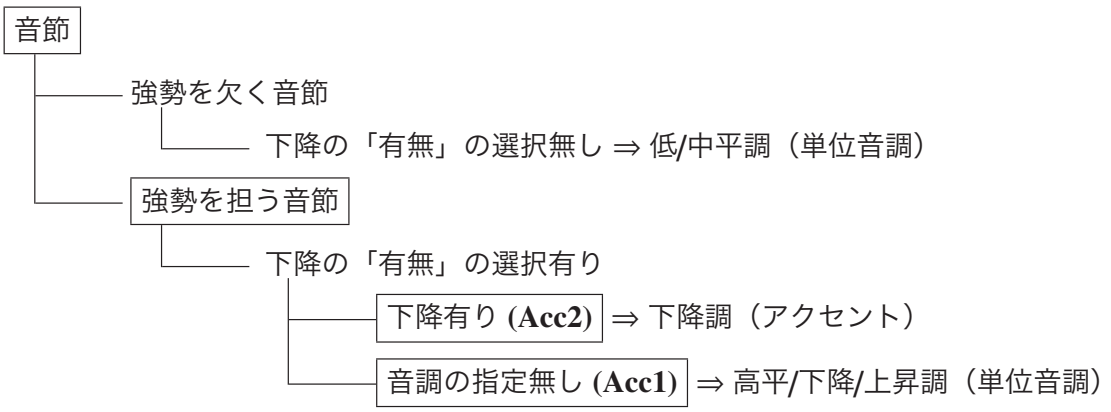


図: Sandnes 方言における韻律構造

b. Acc1 の音調は当該音節の主強勢が音声的に実現したものであり、語レベルでの音調の指定は不要（日本語アクセント論でいう「無核型」に相当）。

c. Acc2 の下降調は主強勢を担う音節（モーラにあらず）に与えられた「音調の下がり目」が実現したものである（日本語アクセント論で言う「有核型」に相当）。

d. Acc1 と Acc2 のいずれの音調型においても、主強勢を担う音節の前後に現れる音調は、全て「アクセント句」の属性である「句音調」が音声的に実現したものである。

本稿での以上の議論を踏まえ、特に強勢と音調との間の依存関係に着目して、Sandnes 方言における韻律構造を図示すると、本頁上部の図のように表わすことができる。

5.2　今後の課題

本稿では、Sandnes 方言の音調に関してアクセント論の立場から詳細な議論を行ってきたが、その一方で、アクセントの基盤を成す強勢に関しては未だ十分な考察を行うことが出来ず、若干の議論の余地が残されたままである。というのも、例えば稿末の表 1 や表 2 に示したように、ひとまずは主強勢の位置は語の特定の音節に限定されないものとして扱ってきたが、これは飽くまでも Sandnes 方言において実際に観察される強勢の型を列挙したに過ぎず、主強勢の分布を決定する音韻論的なメカニズムが背後にあるか否かについては全く議論してはいないからである。

従って、今後の課題としてまず第一に、主強勢の分布が、例えば語（単純語）の音節数や音節構造、語種などの情報から予測可能であるかどうか、詳細に検討していく必要がある。

また、ノルウェー語のその他の方言やスウェーデン語など、Sandnes 方言と同じく音韻論的に有意義な音調を有する言語のアクセント記述において、本研究で提唱したアクセント論的解釈や「リズム単位」並びに「単位音調」という概念が有用か否かの検証を行うことも課題である。

特に Bokmål は、(16) に示すように Acc1 では主強勢を担う音節に「低平調（L）」が現れ、音声学的には極めて不自然な音調を示す（三村（2005: 71, 2010: 184）；本稿での表記と統一を図るために音調表記などを一部改編）：

(16)

a. *bøndene* [^{1}bǿn.nə.nə] LLR]「農夫 (pl.def.)」
（< *bonde* [^{2}bɔ́n.nə] FR]「農夫 (sg.indef.)」）
bønnene [^{2}bǿn.nə.nə] FLR]「豆 (pl.def.)」
（< *bønne* [^{2}bǿn.nə] FR]「豆 (sg.indef.)」）

b. *Karolina* [^{1}kɑ.ɾu.ˈɭíː.nɑ] HHLR]（人名）
Karoline [^{2}kɑ.ɾu.ˈɭíː.nə] HHFR]（人名）

この低平調を本研究において提唱した「単位音調」の概念をもって扱うことができるかどうか、今後、更なる調査を通じて明らかにしていきたい。

さらに、同じくノルド諸語に属するデンマーク語のように主強勢を担う音節の音調が音韻論的に有意義でない言語において、本研究で提唱した「単位音調」の概念が有益か否か検証を行うことも今後の課題である。既に三村（2003）において指摘したが、首都コペンハーゲンの方言を主に基盤とする標準方言では、主強勢を担う音節は低く平らな音調を伴う傾向にあり、音声学的にはいささか

不自然であると言える。従来、このような音調は「イントネーション」という用語のもとで扱われているが（例えばGrønnum 1992）、本稿で提唱した「単位音調」の観点から処理が可能か否か検討に値する。「単位音調」の概念とデンマーク語のような音声学的に不自然な「イントネーション」を有する言語の考察を通じて、いわゆる「イントネーション」と呼ばれる現象の本質の解明へと繋げたい。

謝辞

本稿は、北海道言語研究会第 6 回例会（2013 年 3 月 6 日、室蘭工業大学; 三村 (2013a)）並びに日本言語学会第 146 回大会（2013 年 6 月 15 日、茨城大学）における配布資料及び予稿集原稿に、加筆と修正を加えたものである。口頭発表に対して貴重なご意見を下さった聴衆諸氏にこの場をお借りしてお礼申し上げる。

また、本稿に対して有益なコメントを下さった二名の査読者にもこの場をお借りしてお礼申し上げる。

引用文献

(1) Borgstrøm, Carl Hjalmar（1938）. Zur Phonologie der norwegischen Schriftsprache. *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap* 9, pp. 250-273.

(2) Dommelen, Wim A. van (1999). Preaspiration in intervocalic /k/ vs. /g/ in Norwegian. Eds., John J. Ohala et al. *Proceedings of the 14th International Congress of Phonetic Sciences, San Francisco 1-7 August 1999* Vol. 3. Berkeley: Linguistics Department, University of California, pp. 2037-2040.

(3) 福盛貴弘（2002）.「つかさアクセント考」.『認知科学研究』第一号. 室蘭認知科学研究会，pp. 21-40.

(4) Grønnum, Nina（1992）. *The groundworks of Danish intonation: An introduction*. Copenhagen: Museum Tusculanum Press.

(5) Grønnum, Nina（2007）. *Rødgrød med fløde: en lille bog om dansk fonetik*. København: Akademisk Forlag.

(6) 城生佰太郎（2008）.『一般音声学講義』, 東京: 勉誠出版.

(7) 早田輝洋（1988）.「「アクセント」早わかり」.『月刊言語』Vol. 7, No. 3. 東京: 大修館書店, pp. 32-39.

(8) 早田輝洋（1999）.『音調のタイポロジー』. 東京: 大修館書店.

(9) 川上蓁（1961）.「言葉の切れ目と音調」.『國學院雑誌』62-5, pp. 67-75.

(10) 川上蓁（1990）.『日本語アクセント論集』. 東京: 汲古書院.

(11) Kristoffersen, Gjert（2000）. *The phonology of Norwegian*. Oxford: Oxford University Press.

(12) 窪薗晴夫（2002）.「音節とモーラの機能」. 窪薗晴夫、本間猛編.『音節とモーラ』. 東京: 研究社, pp. 1-96.

(13) 三村竜之（2005）.「ノルウェー語ピッチアクセント再考」.『日本言語学会 第 130 回大会 予稿集』, pp. 68-73.

(14) 三村竜之（2010）.「ストレスアクセントの多様性: ストレスアクセントの類型論に向けて」.『東京大学言語学論集』第 29 号（上野善道先生退職記念号）, pp. 183-193.

(15) 三村竜之（2011）.「ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言のアクセント: アクセントの抽出とその弁別的特徴」.『日本言語学会第 143 回大会予稿集』, pp. 244-249.

(16) 三村竜之（2012a）.「ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言のアクセント: アクセント抽出の理論と実践」.『明星大学研究紀要【人文学部 日本文化学科】』第二十回記念号, pp. 77-95.

(17) 三村竜之（2012b）.「ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言におけるモーラに関する一考察: アクセント解釈と音節の「寸詰まり」現象に関連して」. 日本音韻論学会 2012 年度春期研究発表会（2012 年 6 月 15 日、首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス・産学公連携センター）.

(18) 三村竜之（2012c）.「ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言における前気音の音韻論: 無声閉鎖音の解釈と関連づけて」.『日本言語学会第 144 回大会予稿集』, pp. 162-167.

(19) 三村竜之（2013a）.「ノルウェー語アクセント再考: 句音調の提唱とアクセント論的解釈」. 北海道言語研究会第6回例会（2013年3月6日 室蘭工業大学）.

(20) 三村竜之（2013b）.「ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言のモーラ: 記述言語学的な視点から」. 北海道言語研究会編.『北海道言語文化研究』11, pp.49-62.

(21) 三村竜之（2013c）.「ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言における「アクセント句」と「句音調」の提唱」.『日本言語学会第 146 回大会予稿集』, pp. 342-347.

(22) Mimura, Tatsuyuki（2003）. Stress accent in Danish.『東京大学言語学論集』22, pp. 259-291.

(23) Oftedal, Magne（1947）. Jærske okklusivar. *Norsk Tids-*

skrift for Sprogvidenskap 14, pp. 229-235.

(24) Selmer, Ernst W.（1927）. *Den musikalske aksent i Stavanger-målet*. Oslo: Det norske videnskaps-akademi i Oslo.

(25) Swahn, Jan-Öjvind, et al.（1989）. *Bra Böckers Leksikon*. vol.17. Höganäs: Bokförlaget Bra Böcker.

(26) 上野善道（1980）.「アクセントの構造」. 柴田武編.『講座言語第１巻 言語の構造』. 東京: 大修館書店, pp. 87-134.

(27) 上野善道（1984）.「N 型アクセントの一般特性について」. 平山輝男博士古希記念会編.『現代方言学の課題２ 記述的研究篇』. 東京: 明治書院, pp. 167-209.

(28) 上野善道（1989）.「日本語のアクセント」.『講座日本語と日本語教育２ 日本語の音声・音韻（上）』. 東京: 明治書院, pp. 178-205.

(29) 上野善道（2003）.「アクセントの体系と仕組み」. 上野善道編.『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』. 東京: 朝倉書店, pp. 61-84.

(30) 上野善道（2011）,「アクセント単位」. 城生佰太郎, 福盛貴弘, 斉藤純男編著.『音声学基本辞典』. 東京: 勉誠出版, pp. 320-323.

(31) Vanvik, Arne（1956）. Norske tonelag. *Maal og Minne* 1956, pp. 92-102. [Eds., Ernst Håkon Jahr, Ove Lorenz (1983). *Prosodi/Prosody* (Studier i norsk språkvitenskap 2). Oslo: Novus forlag, pp. 209-219.に再録]

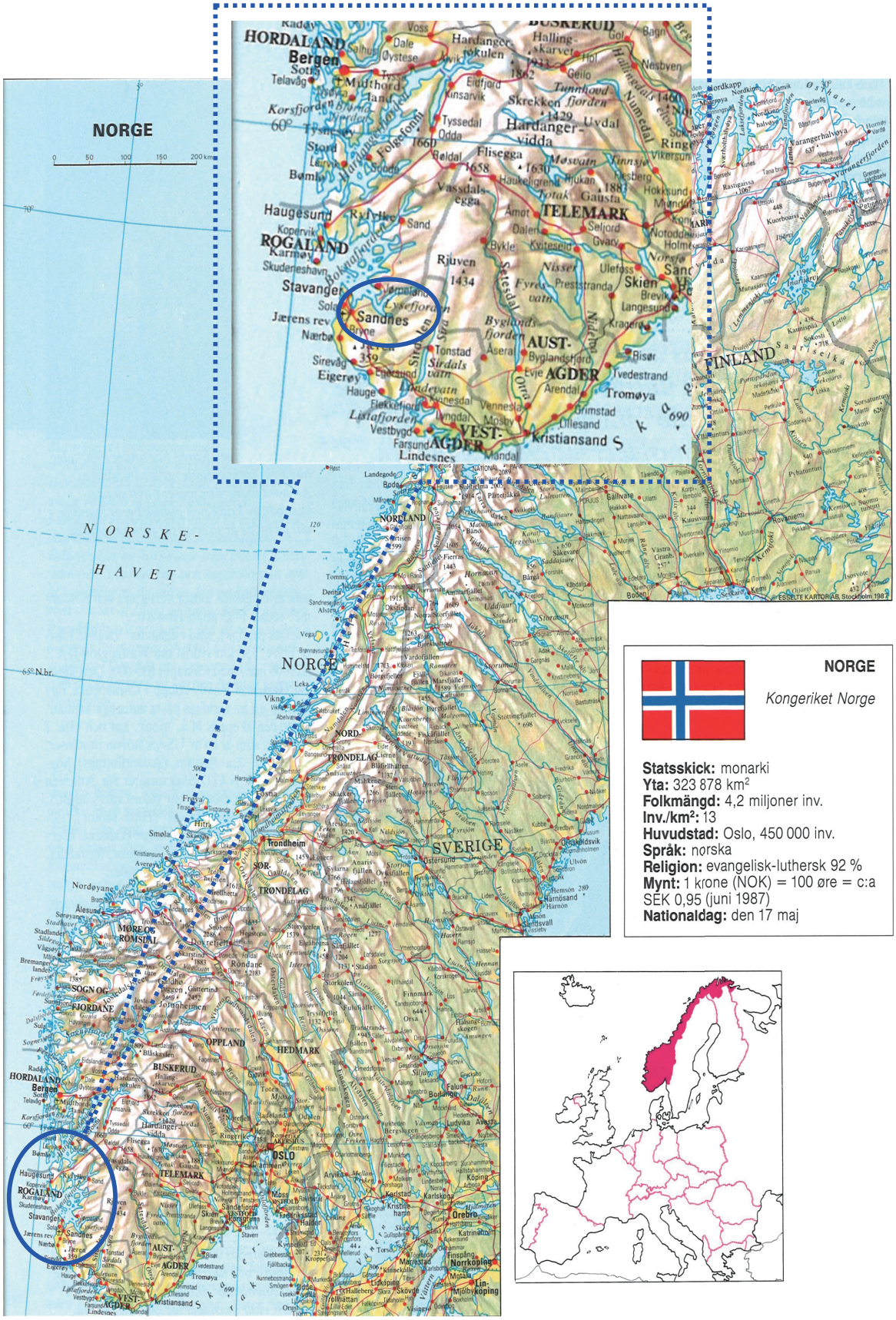
付録 1 : Acc1 と Acc2 の強勢型ならびに音調型

縦軸のアラビア数字は語頭から数えた主強勢の位置を、また横軸のローマ数字は音節数を表わす。表中の「—」は該当する語が存在しないこと（accidental gap）を表わし、網掛けの箇所は構造上の理由から該当する語が存在しないこと（structural gap）を表わす。なお、音声表記は割愛した。

表 1　Acc1 の強勢型と音調型

	I	II	III	IV	V. . .
1	*gi* [H] 「与える」	*vinter* [HL] 「冬」	*ananas* [HML] 「パイナップル」	*reserbane* [HMML] 「サーキット」	*språkskolelærer* [HMMLL] 「語学教師」
2		*byrå* [MH] 「事務所」	*artikkel* [MHL] 「記事」	*narkotika* [MHML] 「麻薬」	*karbondioksid* [MHMML] 「二酸化炭素」
3			*appelsin* [MMH] 「オレンジ」	*Leninisme* [MMHL] 「レーニン主義」	*paradisepple* [MMHML] 【植物名】
4				*epidemi* [MMMH] 「疫病」	*memorisera* [MMMHL] 「記憶する」
5 ⋮					*universitet* [MMMMH] 「大学」

表 2　Acc2 の強勢型と音調型

	I	II	III	IV	V. . .
1	—	*kake* [FL] 「ケーキ」	*menneske* [FML] 「人間」	*sparebørsa* [FMML] 「貯金箱」	*overvektige* [FMMLL] 「肥満の」
2		—	*rutine* [MFL] 「日課」	*allikevel* [MFML] 「しかしながら」	*reklamebyrå* [MFMML] 「広告会社」
3			—	*marmelade* [MMFL] 「マーマレード」	*krokodilletegn* [MMFML] 「不等号」
4				—	*humaniora* [MMMFL] 「人文科学」
5 ⋮					—

付録２：ノルウェー王国と Rogaland 県並びに Sandnes の位置関係
（Swahn et al.（1989: 157）を基に作成）